農家必讀

初篇

中

番外書庫

和書門
類 一六八二三
號 二一六
函 一一
架 三
冊

内閣文庫
和書
類 一六八二三
號 二一六
冊 三
函 一八三
架 三

新刊納本

内閣文庫
番號 和 16823
冊數 3 (2)
函號 183 79

国立公文書館
National Archives of Japan

農暇必讀巻之二

江戸　町田正房　増補

浅草文庫　山崎美成　編輯

早稲

早稲とハとう穂とも云色鄙ふくハ野稲とそいう粳ふいろくの高ひり土地の寒暖土性と考へて利用多きもの成作るへし

その粳ふ粳あり糯ひとえ又その中ふ白城稲といふハ糯ふ似く米ハ色白く粒大きく穂の長さ一尺あまりもありて其茎大きふ高くして芦の如しこれ早稲の名物なり土地ふ行ひ作る所ふくハ粒多く作りて色ふ利潤あるもおそ且稲茎

作る地を畠田ふしてあるべし又畠ふしてハ湿氣あるべし
ふるよろしうらざる地さうゆれハ水稲よりも勝まして実ある
ものなり肥さる地を最よし大こくの土地ふるても湿氣なりて
少し涼く和らかなる地ふるよろし糞のあるけ多入ふかて
作あるべしんを尽して作り耕まくし　○苗地を
ふるよくこなし雪霜ふあるべしたしし置うに熟
糞とうちあさて籾とあ小浸すべと三日ふして取りあげ
日ふあて口ぬ少しひらくとるて灰ごえを用ひて櫂筋を少し
涼くきり麦の莇見たるにむらなくまき土をおりふても麦に
同じ法ぬるべさらばうすさあ糞とそくきて土とれりつべし

猶あひ續きて早ふらハその後もこびくあをそくべし苗二
三寸ふそあるべきときろをふこつぐし但るふひ
あらハ踏付るふ及ばず○種まを莇附ふハ二月末より四月
までの間ハくるしうらべさて後しうあること甚肥さる地とぬるふ
もいらず荒しおきてるとを秋うるびく耕し細こるし
おきて苗の長ハ七八寸なるを待てごんぎを少しふく切りて
灰ごえを以て葱とゆるべく一科ふ三四本焼地ならば四五本
でうゆべしうぶ殊の外ふとるあれば肥地ならばうこのないとく
荒くうゆべし中うち芸り培ふと麦とうハるとは中うちれ
麦ごとふ色とれてよく熟しさる糞あるとうすくしてうくべし

悪じて甘味のつよき物なるゆゑ濃糞又ハあさらしくつよき糞とバ
必用ゆべからず出氣たるものあり○唐まて毎度旱損する國ふ
此旱稲のこゝ移と他國よりも求め来りて作りてより後飢饉のうれへ
と免ることゝ農書ふ記せりうれ石城稲のさねとんそう強れば
何迚の材里ふも田ふハ多之しく畠ふしてハ湿氣ありて思へ
やうに耕作のなりがたき所こゝふらずあるあなきバ旱稲乃
作りやうの心あひ能く考へて作り試むべきことなり是ひの外
おろして多稲の利ふおとらぬもあるなり多ふ
述るごとく悪じてその所ふ前くより作り来りさる物なり
と思ひ入り四きまらてしふまゝ更ふ廣き才覚立べ能ば

用ずして偏ふ管の穴より天をうかがふごゝせい又ハ怠り無情
ふして他の作り物ハこの地ふ合ハぬことなりおもふハ無鍛練
のゆゑ口をしきあとなりと古へも譏り戒めり尤土地風氣の
違ひ有てその所ふ合ざる物もありとハ乃ち人ごとにまへ
稀なることにて大こうハ多入まゝ出来るあれハ五穀ハ
いつ乃ことぞあらゆる品々の物こゝ移を求めその法をふらひく
心と盡し作りて人ゝ用ふハその名物とつゝ物なとこそふく
とも思ひの外ふ利を得るもあるべし土の性を人の才智と
同し心にて必得ず不得ふのある事ハ精しく心を用ひく
その地のお庶をよく見まけ能その手入法をもらひ法と見

さらんは只今まで作り来れる終の田畠の内にてそその利潤
そくばくれ遺ひあるべし

旱稲を水旱両ふ備ふ

吾邦を去ること遠く南なる安南のその南ふ占城といへる
國ありこの国は赤道を去ること十四五度の間ふして日輪
行道の下ふありて吾邦の五六月の頃は彼國ふては大陽北ふ
見て至りて暖國ふりそこふ生ずる稲を占城稲とも旱稲とも
いひて旱魃の時陸田ふ作りて實のる稲なりむかし西土宋乃
真宗大中祥符四年の夏吾邦寛弘八年江淮両浙のあたり旱ふ
ふして田を作ることいたつずらふ於て占城稲二斛餘をもて

民ふ勧へてうゑしむるふ高仰を拯て蒔えとりまきその
翌年乃夏旱魃ふて田作ること能はずしふも尓この占城稲を
民ふ種さすることあり是を旱稲とて西土の稲て
はぶまふ穂長くして芒ふくく粒やゝふなり北をえらはず
して生ずとなり此事ふ宋史及び宋元通鑑なとふ書ふ
見えたり旱稲とは此稲もとより暖國占城ふ生し
さる種ふれはひでりふもいとまを富くふ乳ふさ土地ふ殖く
いでゝまを旱稲とつふ名とは付たるものゝよして即今の岡穂のと
なるべし又清ふの節も言きことふ作まはいでゝる稲ふれは
この物水旱ともやうれ備ふるべし但し素穀ふはあらざま

とも多ふまたれば諸人おの〳〵心ゞけて岡穂の種とハ年〻少しつハ作りて大事の時よこれを多く種て時の雖と富ふべし、さて又そをふも雌雄の穂とえらむべきなり但し洪水ふとハ事俄ふきたるものにて前年より明年ハ洪水あらん某年に旱魃ありとハ前ゝよりハ知れてきるものゆゑどもそれも必をもらひて常〻天地の氣候を考へ時の運を察するときハ前年よりも翌年の豊凶を知らるゝ事ふてうらと心ゆてハ多旱ともに俄なるやうふれども実ハ段〻ふその徴しあるおとふて天地の運行より又更ふ俄ふるとふ事ふらずうふらすさやうふもあらてハ叶ぬを程あるなりされハ百姓

たゝの心ゆふもあらぬ田うゑ付事をあてうふ人を常ふくこゝろえ居て時雖を救ふの良計弐めぐらすべきなり故ふ諺ふ曰歳ハ大抵幾年四ふあるものぞとりふをたゝしこゝろえて農喩とりふ書ふたるしるし

二度稲

異邦ふてハ一歳三収の穀をつくりとうて聞えぬれども吾國ふハ古より再熟の稲あるおとふし日向國のをふてもひこぐえより取ることあるとも米ハ性大いふ劣しふ出るふ近ハ土佐國ふて年ふ二度ふ多て収納することを覚え来ル作りひろめりとゝなるハ稲の刈さる株より出るひこばえと遠ひ早

毒ふ苗代して六月ふ収め又植て初冬ふ収納するふれ来れ性も
よろ〳〵く大いふ利益あり拙ずるふ薩州大隅日向阿波讃岐
紀伊熊野丹後河遠江伊豆安房この国くハずて苗とうけく
暖地ふれば作りて出来ざるこハあるこうずとれもいるもの三四
年も作らざれハその使憚ふハ至りがたくうんひさすら捨ぎて
粳ふ試むべし一年作りそうろう拙ハ四方どもみく成たるたぐくく
うち捨ん迫ちきふ仰ぎ見しそれ田のあるどうう命じまひ村長
すべき者ふ試ささやるバ年あらぢて一田ふも及びうんこれを
植はじめるる人ハその田を富するへなるべし○種ふハ土佐ハ高
知の名ふ高くハ戸孫六ふ稲といへるを来る粳ふ戸孫六と

この早稲を作りそ初めし人の名を呼びて唱へうと及ぶこれ種ふ
のくふもとるまで一日ふてもそ高く熟する早稲とつくるふ利あり
と拙のいるとうてこの稲と作らんと思ふ人ハ本国よりやく熟する
早稲の種子とえらびでう急さらんふハ戸孫六の種ふふも劣るま
さう彼国ふて種子ととるふハ戸孫六のそれ年つくりくるうち
穂のそやく熟するをえらびて取り翌年の種ふとするなり然れハ
本国ふ殊ふはやく熟する早稲と作り一年試ふそれ穂の内を
やく実のる穂あるとふとくくそ高ふと付垂き粳ふ内ふやく
熟ずして穂とりて翌年の種ふとし一年くその如くせバ癖づきて
後ふ至らバすべてそやく熟する種ふのみでまて彼戸孫六ふまを

をはく劣るもの○二度めふる名る種子ハ平常ふ植る晩稲と撰ひ
うのべ○田をもて熟田ふ作るべ○ハ田ふ作るべからず隔年ふ
替て作るべ○二年ぐけて作る時ハ出来るさまうべ○苗代ハ
麥の彼岸入より中日を度として種子籾をつけて萠あんだい城
うんが苗代小蒔おろすなり但し籾を侵す日ハ一ようさもうけの
考く苗代小蒔おろすなり但し籾を侵す日ハ一ようさもうけの
池ふ浸すべ○花畫ハ日ふあて夜ハ覆ひをすべ○さて生年ハ氣候ふ
よりて苗代ふ氷のさることあり少べも障りとからず肥○ふ入れ苗の
苗代するべくふてちべ○暖なる日うけさき土田をえらび苗床と
すべ○その餘ハ其國ところふ仕ふれさるやうふすべ○○植付ハ
三月中旬まで苗の伸と入合ちうべてちべ○花植る田ハ常田を

うるるべ○らくのべく二月末より灯之○氷を肥○を入き
土むらるきやうふるきこと長してうるべ○花常ハ田より落く様數
あらくうるべ○○草を肥○ハ常田ようるるてなる○伸あ○く
ハ小便とうちつくべ○志う○肥○ハ常の田より強きうとうち
○刈取ハ六月土用入より土用あけの頃ふ刈るべ○よく乾る後
そろく刈取り直ふ稻ちつけて干おき早速二番うるおるり
うるべ○　稻をとるとき及びはるか利方その条に載し○右のおくるとてすぐふ地を
うちつべ○牛馬あるところハる把と仕のみてすきうべ○よやふ
地稻をとる事ちり土佐の國ふくハその時ハ夜通○ふ寐
ずべ○地稻○ちるもべ○○扱二ぞん植付まひて後右

六月再種の図

苗代の朝露とれとて
二番ゑの苗ハ
常の苗代より
廿日なれハ廿日も
たつる荷付行も
六月土用の植旬
まてゑのびるてゑ
あり伸るといふ
ゑて痛むとあれハ
五月末の比までゑ
のびるとゑハ翌
ゑやく田ゑより両方
の畔ゑ五寸ゑを引
其中にゑころの石
とゑり付ゑるとし
ゑゑをさけ力ゑを引
ゑりて苗のうゑを引
通紙ハ縄まて義ゑ
つゑり勢度ゑ荷ハ
苗のびざるものなり

植ゑみ干置さるところ代一番早稲を家ゑ荷ひゑて畠
ゑちよりて夜なべとゑみく打あゑひこぐ〳〵○二番ゑ植る
苗のこゝゑやうハ二番ゑふゑゑる晩稲ハ常の稲の苗代より一ケ月
などゑを延く蒔きおろ〳〵餘り苗の伸ざるやうゑすぐ〳〵○植る
ゑとゑハ二番ハ株數多く常の田よりもちゞめ方ゑろ〳〵○おゑれ
植ゑる稲ゑれば肥〳〵草手ゑ抜ゑ念入ゑぐ〳〵○二番ハ八九十
日の間ゑ実のるゑとゑれば伸あ〳〵きそのゑり○刈時ハいづれ
常ゑ稲よりおそく刈入ゑる事ゑれどその用意をすべきゑとゑり
○刈あげてすぐゑ麦蒔くこゝゑらすぐ〳〵
下総ゑ師ゑハ寒氣もつゑく雪ゑやくおく所ゑれとも稲を

刈八十月末霜月ふりて刈収るなり美濃ハ植付おそくめる
ともおそくれども米性よろし刈ることハ霜月中にすれバ害ふし
二番の米の性を常ハ米より性よろしく米に痛こふし然れども
出来ることハすくなし藁ハ常田の藁よりよろし併牛馬ふ
ましませてよろし

上田壱反歩　但壱坪ニ叔弐升弐
壹番稲　叔六石　此米三石六斗　但六合ニすりにて

中田壱反歩　但壱坪ニ叔六合弐
叔四石六斗　此米弐石七斗　但六合すりにて

上田壱反歩　但壱坪ニ叔壱升弐合弐
叔三石　此米壱石九斗六升　但六合五夕ゟ
二番稲　二ばん稲ハすり良し

中田ハ右ふ准ず

右ハ作りやうハ米の出来高その外の事ども精しく吉めて試ミ
ることなきゆゑ必疑ふべからずすべて國ふ米と作る農業第一
のつとめなり一升ふ百ともその國ふ米の多らんハ國主領主の
宝とまたその治理ふ天理ふうがふといふべしよってこのるを
よくく記して東國のある侯ふまりられを領中の民として
試ミまふふ稲の暖地とりふまをあらねどお庭ふ實のりしと

なんさらば始ふ記〜〜るゑくふ出来ざるものあるべきやハそぐ
ねぎっくハ再種を試ミ世ふひろまらんことをおもふこそ方

再種

麥

麥ハ秋うゑて夏熟す四時の氣を受く舊穀のつゝる時いでさて民の食を助けつぎ新穀の出来る時ゝ至るされハ稻ふ次く五穀の中ふく貴き物ゝ此ゆゑよ聖人これを重んじ其秋ふを稻と麥との損毛をバ記さゝるて実ふ近世静謐ふく人民多くゝゝりぬ麥作のつとめ疎ふらハ食糧乏しゝ〜〜ゝるべきふ都鄙ごとを作ることを考るゝゆゑ麥の多きといふ〜〜ふ待れりさまハ今民のやゝふひは助けとふることこれふ續くあなゝ

實ふめでさき穀物なり○麥ハ黒墳ふゝ〜〜て黒土ハ性乃つゝさとはゝて弱く薄き地ハ大麥ふよゝ〜〜す○種子ハいろく穀多きそのなりもだゝ麥の内ふそ米むさやす糸むさやす赤むさやす此麥やすとふ田舍の又ハ廣島ゝどゝ云ふどゝ云ふのゝ稻麥もいろく多〜〜所のお國と考へえらびて作るべし麥雨ふぐき所ふくハ毛の短くさハまぐして雨霧と合て穂の痛む類とハ作るべくらすされども六角ゝて毛のなき稻麥と蠶豆と〜〜てよき地ふ作るべ過ふふ実のり多きそのなまそ下人牛馬と養ふふならびるべき物ふり彼こまいろく作

麥地をこしらへの事畠ならハ麥ごしらへと深く四五遍も耕し細くふうきこなしやすめおきて時分と待べし田ならハ早晩の跡をうるおひをきて内より耕べし少しづつふきこなし肘耙ゆてうきくだき若塊をくだけうねうねとハ土をうりふくし細くふうちくだけ

畦作まし後の作り物の勝をふませてよこの筋を切るべし来年本綿その外夏物を作る地ならハ間を廣く又麥を作らハ少しづつ肥土地の肥瘠ふうり肥地ハひろく燒地ハ麥のうぶ毛げうらねものなれバそせをうろ得して筋をとるべし但し筋の底業所のそこのごとくふうらねやうに底びろふきること肝要なり底せまくまバさねもこやしも小筋ふうりて麥の根一所ふ生じ切ひてうら細く弱く風雨ふさわまやすく実のりよろずみぐんざ浅くれバ寒ハ風寒雪霜ふ痛ミやすくその上ハ陽氣中ふあるゆゑ麥の根少しふくも底ふ深くいりて暖なる氣に合く自そべこうふとたまバ麥よりこうして日によくあたりこる細土と

そこふへしたて蒔くときの肌糞とよく和合し麦の立根これとまぜて
底ふかくいまいを中ハ上ハ寒氣ふせあられ葉あくなりて痛む
やうなれども立根ハ冬ありて底の陽氣ふあひとびとりて事ふ至りて
陽氣地上ふ充つる時その温氣と得ておりひのまくふ盛せし稈
すぐやうふ強し又根の土ひ厚くれバ少くの風雨ふもこふまこそ
実ありときて穂ひろし去る故ふ麦畦を作り筋をきること
深さ三四寸ばかり底びろくきをとりとす若ゐぎのまり
やうあしく麦ぶね一所ふうまること生じ一つ穴より多く生ずる
るバ後のまへ入り難し農人この所ふ意ふ心と用ひべし非農
人のるらひふくあつくまぐさと貪り間を七寸蒔くときハ中

うち培ふともありぐくうる物の豆もとふ日風のとをるふとるのき
四五日うげ草のごとくふて実のり必うすき物なり○種る式
下す時分のこと秋の土用ふ入りてまくと上時とし蘭の終り十月
上旬と中時とし十月末二十日須と下時とす又八月上の戌の日より
小麦と荷をじめそれより陰くまた大麦とまきさ九月下旬十月初めふ
荷法るとをとするるより何まもとろ風氣ふよるべし本綿
跡大根法るどいこの限りふあらずやむとこと得ざまバ小麦をと
るぎず大麦ハ歳を越すといひて暇るるまバ小麦もまをふもう
うり大麦ハ歳の内ハまきてもくてくらずとこと云ことふりさいり
あるて九十月の後うるるらべうるならず灰ごえ馬糞るどれ

ようさこんと多く蓄へおき肌糞をとく困ひ種子にかけひと厚し
おけば雪霜ふ痛まずして麦ふそなわりさまどそ
實のりハ少し○又麦のもとのこと先蒔ときの肌糞ふ鶏の
くさらくしよ同じく粉ふして灰と合せるようくし油糟
人糞いづれも灰ふ合せるがよし麦ふ灰をくハ蒔ことゆえれとも
志るしおかり分け小麦ふ灰を以ておかハざれば寒乳ふ痛む
ものなり○又云鶏ハ沙地ふ用ひそ志るしつよし真土ふ油糟よし
湿乳ある地ハ木綿実の油かすよし土地ふよりて糞のそなへ
異なり　農業全書　精ハ肥糞の條ふ詳なり

麦を作る心得

麦を作ること上の地ふ功者ふる農人鬼ありるどりへる麦と地ごし
らく糞しもを尽し時分よく蒔て打ぐの糞養志ごとく調ひ
さらバ一段の圃ふそれ實のり六石五斗七石ハあるべしその次ハ五石
七八斗より六石五斗その次四石七八斗より五石五斗中の下の
農人ハ四石五石の間ふるべしそれ下ハ二石七八斗より三石四五斗
なるべしこの農人ハ一石五六斗より二石三四斗その下ハ志石
より二石の間ふるそのしたハ七八斗より一石一二斗○右ハ三ふ
同じく上く地なりおのく作人の上中下ふよりくのごとく
うるもあること云なり右の内一石五斗より以下ハ志る時分
わそく地ごしらくもさらず糞しもなく後のよ入れも志らく

せざるの名うくれぬ一但前ふ志ろ氏六石七石とつゝをバ遠國ふそ
あるひハ土地のあ一き村里ふ住ゞ他所を志らぬ農人ハ特ひある
べ一都の邊ふくゝ麦のぞゝふ多くふれるもこれバ遠方
田舍ふくゝハ作人ふりり甚善悪あらんか村中より同所ふ畔ゝるゞ
みハ同ど地を分て作まども一倍も三ぞう倍も替りて丸ゆる麦あり
こゝかその作人ふりるものるりこゝまハ村まより所ふりいりるども
多きおとふれハ農人こゝふうゞひまるゞ一稲その餘の五穀
の類をバ我委一く試ゝ知らねそれくふつさてまゝしき替り
あることとをひぞ一志うまども麦だりハ作人ふりはるに
善悪のうるまありてその餘ハこゝふまゝ入まゝくしてもできハうそ

らずと云理あらんや我麦のとゝきハうねてよく関覚えゝ見覚え
されバ記すことゝくのごとしこゝまゝともて考へ見れバそれ餘の五穀も
この類ひふゞ一その上前ふ花す園菜の多少花の出来乃
よ一あ一を以てもうゝ老人か物語一ツも偽りふらぬゝと云
出りぬ農業全書附録
麦を作るすぢの事春ふありてすぢハ間ふ木ゝ瓜豆大豆
さけゝ芋茄ふどとも作るそのうゝ名物ふりそれくの宜まれる
わどあり又麦を刈て後そのあとふ物を作る地ありこゝ地に
みすぢの切やうゝ志ふ一くありとゝえゝり麦をまくすぢを少一
ひろくしてすぢとくの間を一尺四五寸ふそゝるありすぢのそゞ低

よき頃ふして間を一尺二寸おくもあり少し筋ふく間
八九寸一尺ばかりあるあり猶七八寸ふかるもありこれ陰く
地よりの農人の才覚によりその分けあるべきもよく心ゆ
考へ見さらばその所のお歴やすくとさるべしその村の庄屋頭
分の輩才あるものよく試てその里ふるひさる宜法をきはめ
すべくの不才なる農人ふ委しく教ゆべし○ある上手の
農人のいひそるそすぢの間二尺四五寸ばかりて筋のひろさ
八九寸一尺ふを作り温氣あきところならばすぢの深さを二寸
餘ふこしらくるべし糞とおきてもなほ二寸餘もすぢふくく
作り麦を薄くうゆべしこれハうゑ時も九月をゆめふうゑ

尤地ごしらへ糞ともよくして鬼あかと六角麦米むぎやそとを
蒔べし糞四びとり小便一三度もうみよく中うちし草
とり去ふふり土とうだきこ両方ようさびくふうみ莖のび出るに
ようさびひ次第ふ多く土とうみ後ふハ中を堀りその土とぞれぞれ
ふ根ようせ終りふハ根の土ハ九寸も高くうゑやうふうくべし
ひろきゆゑ紙ようそぐりふ土とうれば麦打れ麦大できくして両風ふ
ようむものふり念をのきふみそうくべし
あふとうくとも傾き倒るくことあくるべ分ふ實のり多し但これハ
下農人ふ成りごとくくうや○麦蒔やうのあつき薄さを
土地と蒔時ふよりうとうりうう簡すべしそべて薄きうとふ
利あり　同上

麥の苗をうんであるうちそだれば知る

麥いまだ實らざる先ふその年は豊凶らく知らるる術ありそれハ麥ハ苗一本より生立て根ひて幾本ふも滋生て実るものなり依ていまた一本さちの時ふその苗を抜て見るにその根七本以上あらハ麥いあるうちとおもふべし根ハいくとふても數の多きに根ひて莖も多く滋生れハあり又根五本以下ならバそは年ハそだれとおもふべし根少なきハ葉のあまく滋生へきやうなれバありこれこる數年さめしゐんたるおとふて更ふ偽ふにらず然れどもこれハその年は氣候その土地乃厚薄やうりて然あるおとるきハ前うこうやく預めこれを知りうて麥苗の根を多くこれをすべきことを致ぐこさものなれバこれを知りうきて無益なるふ似さきども早くこれと覚ることはその心得うて他の種拘栽植つるは仕方をあるくまるハその年は麥の相場ともはうりてこれふはきて利潤栽得るのまぐもあるべきあり　穂立手引草

深田ふ麥栽蒔く仕法

ある人攝州西の宮はとりを往きしふ播州の龍野なる農人と道づれふなりてそのなぐ何くまと物淡りは次て深田ふ麥を蒔く仕やうやあるくいたしふ彼人おいてるにそ播州ふて八深田を耘う麥と作るふ限ありその仕やうは

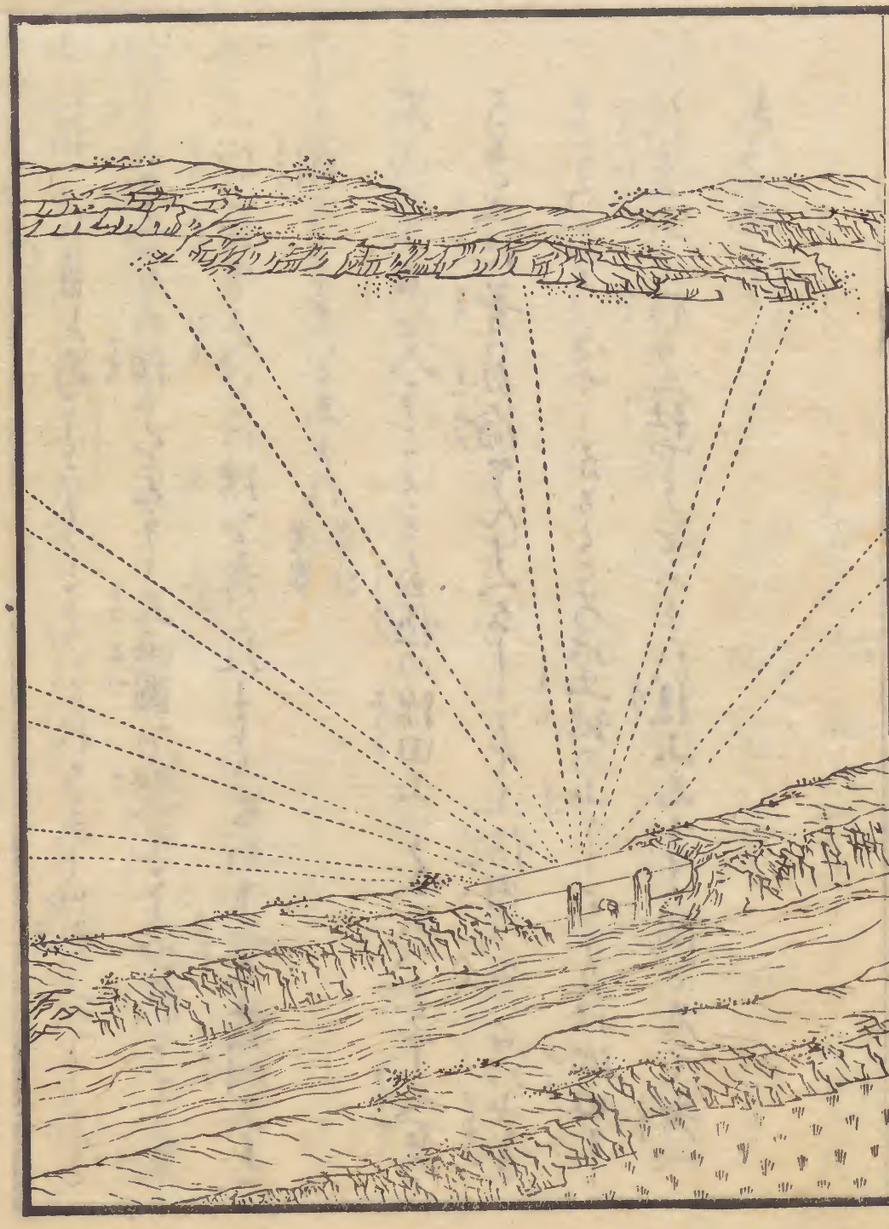
大麥雄穗（おおむぎとを）

同雌穗（おなじくめを）

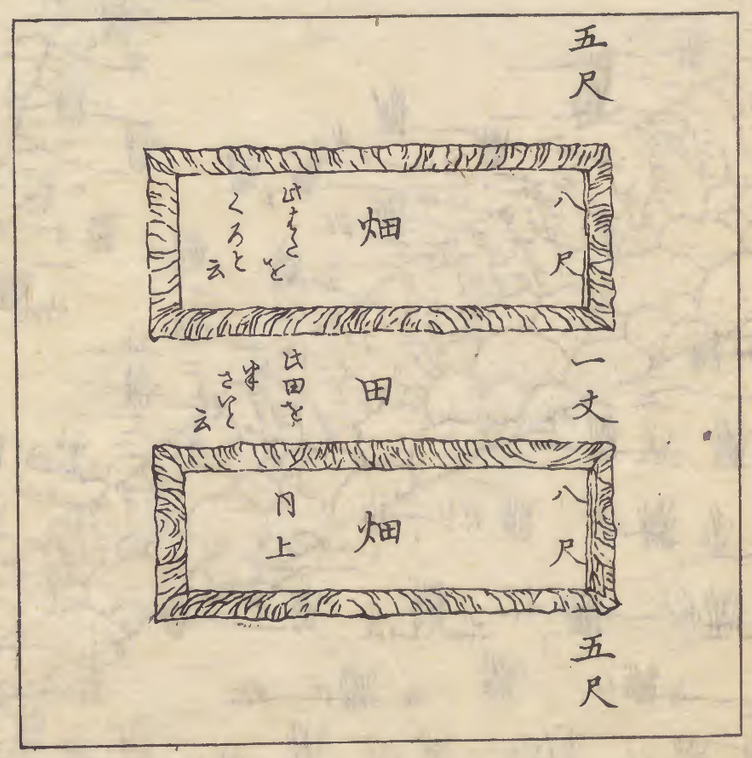
先深田の畦上と水下とを穿ち深さ二尺五寸ばかり廣さ三尺
ばかりの溝を畦上の方より畦に向三間ばかりつゝ間をひらきて
扇の骨はぬくふ義筋も堀とその要のところとみの落口
とし扨一抱むかうの石をその溝の中へひしとならべその透間
くゝもごろはぬ小石をつめこゝへのぶとくふ枝をもらして田を植る
ときはその畦下要のところふ松の木は角そのまゝ横ふ入まて
水の流るゝを防ぎ止めあとゝゝえて田をうゑ九月の頃ふ
至らはもしめ塞さるあとは材木を取り除けるふ無てふせ
おきたる地中の石は間より流れて田面の乾く時
刈田して日和を見合せ常の田と化れ〳〵く乾さりる時分

ふ地拵して麦を蒔ことなりとゝこられきおとれ外ふおもしろき
利方とおもへいその話しを考る且画圖を加へてこふ載せり農
事ふ心を用ゆる人はこの理を考これまりるふも工夫發明あま
うと聞ゆるまゝを考へ光農茶話

右ふつゝ石を入ることを玉極の深田ふはるふべうもず又石の
ゐき土地等ふ勿論せんすべるしすべふ河内の色ふ石は少き
ところふりさやうふるところは土地の少しむうれは深田ゝ
徐麦ふゝ作らん仕やうとふてひ様ふ考へ図を見て考へ
知るべし



国立公文書館
National Archives of Japan



小麦

小麦とるゝ事〻地のこゝらくそのゝ外大麦ふゝゝることゝゝ大麦より十日二十日もとゝゝく蒔くべし さのゝ肥こゝらと好まゞ若すゞれて肥さる地ふ肥糞を多く用ゐれバ根腐る事あり専灰糞をとりつくるべし少し湿氣を好こゝ底の土をあげて作ることを好こゝて高くうつきてゝゝゝき土ふよろしゝらゞず大麦よりも初め終り仕舞を早くすることきふ子べし春ふゝりて修理のおそきハ實のりよくつらずそれ上春穂ふ出てこゝのゝ時分地の堅く引きむることを好こゝて根ハ土ふいきこゝろけこゝと嫌ふそのゝり○小麦ハ取ゝけ念を入れ種子をとゝゝらぶべし種子あしくまハ生ゝぬるものゝりまじ

ヤるく實のうちを夏の土用ふよく干し粃雀麦と籔さり
て湿氣のふきどころふねめおき苗ときも虫くひとよく去るべし
これ又種よいろくあるものあり土地の相應をえらびて作る
べし山島ふど猪鹿鳥の害ところふハ毛のあるを作るべし又風
をげしき所ふハ穂をつよく實の落ざるをえらびて作るべし
○又云麦をまく地をりそめふもあり氣のつよさ時ハ耕し
蒔べからず書年地をまりて麦の盛長あきのこならば来年
の稲まで出来よろしからず但し小麦ハ少しあり氣の時苗
ころぶ実のうち○又ふ麦弥ハ田瘠るものふり田ふ小麦弐
作るとハところふりて遠慮すべし小麦のうら田ふへまバ

毒ふ多ふ田ふ多ふりうやうぶを毛土ぎやりつあて刈耙ふくう
くとき田ふある麦うぶとりき去るべし　農業全書

掛干の辨説

農家の業ハ心をつけて九ふ稲ハ刈て掛干ふすれバ第一収
米多く米ハ性よく搗て減りすくふし虫付ふとも薄くその
外莫大の得分多しといふるを大坂の西市岡新田ふる長ふ
この事を語りしこのくまめくしく三ヶ年試こくるふ右
ふいふる如くそのところハ米ふ限り近村よりハ殊ふ米に艶ありて
賣直段もよろしハいふるとふらんと問ひ来る人毎ふこの事
を教へなバ四五年を待ずしてその名りの村ハすべて掛干ふ

するとくハるゝねその人手ふ語らまくるハ我支配する新田凡百町あるゝゝ迄ふ三百石ハ〻〻らに収米多くゝりしのこたるゝゝいゝも同價ふ賣〻近村ゝりハ壹石まて銀三匁ゝゝりハ直ひげして仲買の者競ひて買やうふゝゝりとれ金くその許の勧やまゝりてゝりとゝいとゝゝるゝゝとゝどもその餘を掛て干事なるき所も多〻〻出羽名の雪國を都て掛てゝ〻〻又畿内名ふてもむ〻〻ゝり仕来れる地ハゝゝる海ふの多ゝゝとを志らず總て田地ふ乾地あり濕地あゝゝ深田ありこの濕地乾地ともふ稲を刈てその儘その田ふひろげゝ〻又深田ハ刈て堤のもら田ハ畦なゝ〻干事ありこれらハ

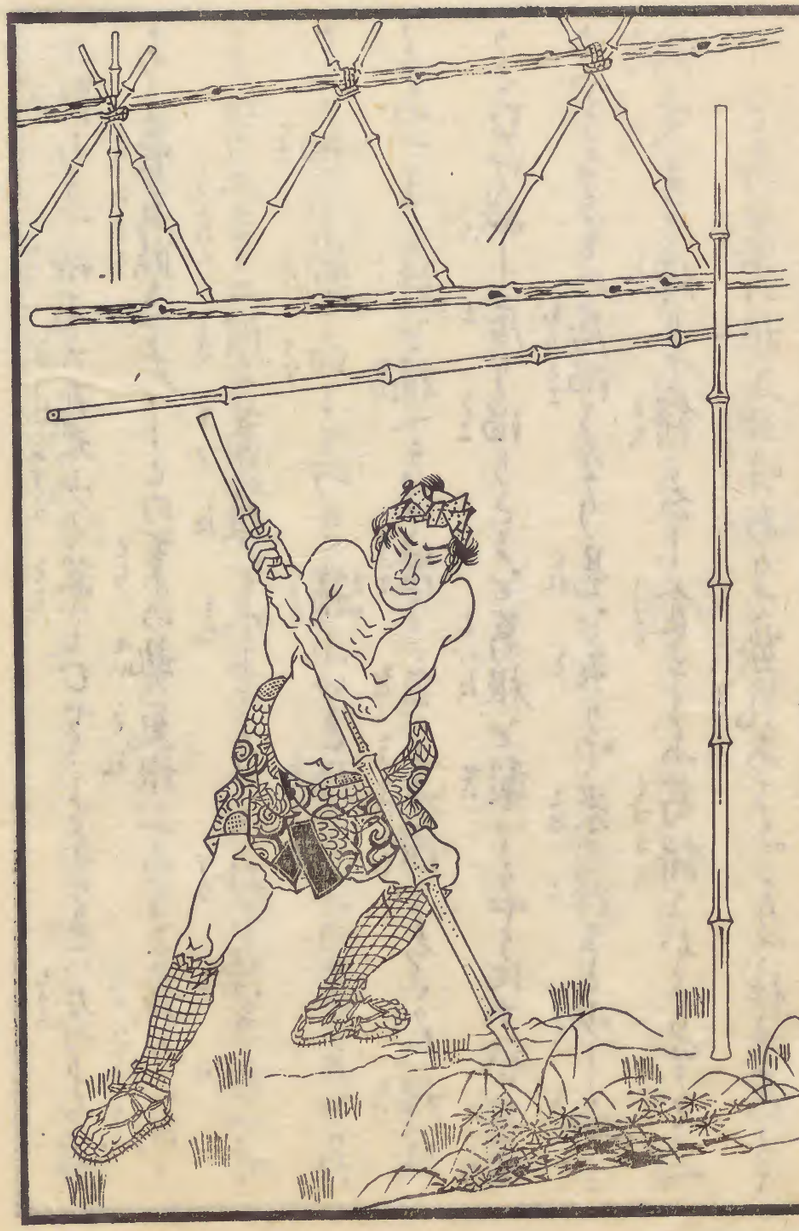
干やう甚ゝゝゝらず都て人の氣はつうぬことゝゝれども何ぞの國いゝまゝ地ふを硫黄の氣のめらけるゝ（硫黄焰消明礬ふの土よりまゝゝゝとゝて志ゝゝ）雨ふれハ地中の熟ふ蒸まて硫黄とゝみ氣と調和して人身の蒸發氣のぬく大陽ふ照されてゝゝまゝと吐く又米の質ふ燒酎れ氣ありゝまゝ即硫黄ゝり依て火のゝりゝやく燃やゝしバ熟き火あゝゝゝり燒酎も酒も火ゝゝれバまき火をゆゝふて志ゝ　この氣ふ蒸れて粉ゝり芽を萠ざ〻米の性氣ぬけ艶ゝく飯ふ焚て味ひ落く収米少〻又志ゝく雨ふりて刈干ゝる田く水つき二三日を帶り稲を浸〻やゝく天氣ゝふれバ大陽ふ照らされ名雲地ふ吸ひゝゝ又陽氣となりゝ立登り盡て干潟とゝるゝ（渦ふゝゝゝと入まゝ火ふゝけ無ハ決氣の熟ふて陽氣ゝりて志のゝり登ゝゝゝり陽氣目ゝゝゝゆき

とも大陽ふ照されてのぶる気ハ稀　この時陽氣盛んふして物より芽を生
萠して目ふハえんぐ〳〵
ずるなり且谷間の地高山の下なる地ハ日の出ること遅く又西ふ
くむくなとを早くをバ乾く間〻〻ときのをるゞ地氣に
蒸されて〻ゐく豊熟〻〻ちとも詮なし故ふすべて稲を刈てハ
右ふ図するが如く逆ふ掛て干すべし
按ふ稲を刈て掛て干すふ利あること古より〻〻ることなれども
田家ふてハ耕耘の業のつとめて知らぬ地もあり又ふくゝり
ときゝとりても利害とときさへねもあるゆり掛干臺の名と稲
機と云類聚三代格ふ載る承和八年の官符ときやく見えて
り和亭のふてとゝ云もの即掛干臺なり曾丹集ふ山ゞつ

のまゝふ刈干す麦の穂ばけて物をおりふるる塩河院
百首ふ宿もせふ朝ど稲をたゝとりはまてとのひてぞくべ
ゆるる百首の詠ふてハ稲をうけるそ垣ふり又垣のやうに
柱を入まゝ遠へて立さるものといひ今畿内ふてもゝだて
ともいひ北國あちふハとさとりいづれもその訛れ轉訛る
べし或ハ所ふよりこまと稲本といひ日本紀ふ垂仁の皇后
の兄稲城ふ入りて戦ふとあり又成務紀ふも縣邑置稲置とも云へり近来集解ふ按ふ聯木
積稲而為柵落也といひ古言の遺れるふるし
掛干ふすれハ藁の精氣ふりて米ふ実入よく利方あり且米

ふ艶ありて俗ふ云死米少く藁もむせることふ久ハ力つよくつや
あり賣直段もよろしこの藁の勢氣根ふあるを或人ふ聞し
ことあり凶年の時ふ藁の根を水ふてそゝぐ砂を除き根一寸
ばど細ふふ割ふ臼ふてつき箒ふいき桶の口ふのせてあとをけ
ふてもこ汁を桶へうけて澄し垂ば上水澄ふてまゝ横絃
くもけ減し居り淀りふを葛根を製するやうにすれば葛根
のやうなるもの居淀るなり是を乾りて米の粉ほど少し合し
鍋ふ入まて煉りて餅とふし食ふふ葛餅よおとらずとい
りこまハ藁の根ふ甘味ありて勢氣あるふりて仕ふるふ
いりされハ此勢氣粉の方ふ移り米十分ふ實入る道理あり

窮めくろうしてこそ穀ふぐくらべ　豊稼録



獲収め遅速の利不利

或所〻稲を刈て田の中〻に付て干すところあり又刈てその侭其日扱て収所あり

此如く株をうつふせ穂を地へ

刈てその田一面ふひろげ二日も干てその田一場所成ところひ

稲歩棚と唱へ

打落す所ひり此仕やうをとハまみて干方を好めり尤田一面ふ

刈干することなれども雨ふる時ハあふ浸し前論ふもりつる如く

甚不利なり然れども往古よりその如く仕来れるゆゑ此その仕

やうより他術なるものと心得居るやうの所の人ゆをを

掛てハ干ざるやと問へそ麦ふおくれハさやうなものいるとハ

仕てあられぬと苦ふ志る者とも多くして左ふあらし掛干ふられば
苦おれまハいろやうなれども布て麦蒔ふハ便利ありまづ稲ふ
まを後の田をうらべ片隅の日あたりよき所二三畝ばかりふたてをつ
らひ其所ふ片よせ掛て干すべしさすれバ畝の地あさぬきハ
早くも耕し麦をまくやうふも侍へすべしその掛ておくる稲ハ
その間ふよく干揚るありその時自家ふ荷ひ場り婦女童のまに
あてがひ扱すべしまた夜ふても出来ることあり深田ハ掛干に
すること勿論なり
正房按ふ稲打棚といふものは古ふなし中ころ出来りそん
今も日光道中ふハこの器を見ることあり往古ハ箸のごとき

本ふてきをて扱とり農業全書の巻首ハ図の如しそれより
色部まをてこの稲打ハ用ゆとなえとり近年ハ鉄をもく作る
稲扱勝まて便利なれハ田家ハ皆これを用ゆ並河の五一ゥ和泉
志ふ拖把俗ふ例寡と云元禄年中高石大邑の人始めて
造るその製横木と蓋とし長さ三尺ばかり四脚をて斜ふ
支仰ぎて扁釘二十ばかりを歯の長さ五六寸一束の稲を
扱うけ一扯ふ藁を去る一日ふ二十束を収ひべし大イ
ふ間を省くといふ今ハこの器江戸ふて世俗大門通りと
称する所の鐵物屋ふ出来合いくらもあり

掛干さる籾ハ一日やして収納めてもよく又籾干せどともくるしからざる地方ハ干さる籾ハ三日も干ざれハ摺ことあるハけす秋の十月の天気なれハ時雨ぐらふ三日干んと思ひて五六日もうるべきなり此ハ雨と掛ふを時のまなとへうる心ならばまづしも掛てわす方はよろしくてその餘の利方あり

右ふ記す田ふて扱打落すおよ術ハ三四日先の天氣と見海さねハ天氣とり難しまく天氣と見合セ明日ハ稲と刈べしと人を多く雇ひ入置つるふ十月の天氣なれハ夜ハ間ふるりて雨ふる時ハ徒ふ手者と空しく老て見合セて日と延しふる内刈初と矣ひ変地の掛へ多能りあしく成ことなりこの掛干ハ少しの雨天ふくも蓑と着て刈てゞそふるる幸なれそ大雨ふてまくハ日和と見合することをいらず仕業の積りもまもつまるく大ふ便利なり

だてふ掛て干稲を刈ふる別ふるひあることなり先田ふ入り毒振り刈て元と身毒ふ穂と向ふ重き又一束りて

持さる鍾を地面ふ垂その手ふて持さる稲と十筋ゐ分けて
所りその殘りを初め地面ふ置くさる上ふ少しく遠へふき右
十筋の稲を以て束ふ結び地面ふ垂次第ふその如く志く
ゆけハ別ふ束ねるふ及ぶ右拾筋程分て結さる稲の穂
先さる一やうふならび揃ゑやうふ結ぶ〜〜○さて刈ものひて
干す時ハ二握りを少しく遠へてくりさる束ハ自然ふ
穂先二ふ分るるそのまゝぶてふまゝけ干べ〜
二三日を経て稼割をそ〜さる稲の稼を逆ふ〜〜
むらるくりて山伏の形上のやうふ束を先ふ詰て行へ
しさすれハ稼干場ふ多ぶ稲の乾きよろ〜この稼ろ

ふくるく時ハ穀の乾きあ〜さのゝるらず風吹ふハ稲を吹落すの
患ひあり○掛干ふして利あるとハ第一上納米ふ〜て除米
多く国米ふする ふ虫の付く悪ひるし〜いんとゐれハ地面干ハ
上ふ干りくる方の穀ハ乾きよるれとも地ふつきさる分ハ前ふ
いる如く地氣ふ蒸れて乾きあ〜くられと急ぎ摺立て納る
とゐれハ藏の内ふて発るまゝ〜の米より蒸セけて虫を生ずる
事必然なり此掛干ふて〜くる米ハ存分むらるく干揚りくる
四ゐ生質ふりて堅く湿氣さつきりゐれハ蒸ふて虫沈
生ずる事甚稀ふり又ハ国藏の風通あ〜く蒸セくゝま
さり虫を生ずる事ありとも地面干ふくられハ三ケ一もなり

米は減方多くを俵にして三升も減るとなを掛干ふもまた
一升も減べきなり○さて便利と徳とをいそぐ田を刈ふ日和をえ
合すふ及ぶ少しの雨ふを刈らるふまして旬をなづさば
○掛干はすまず麦蒔地ーーらくふもつれるー○稲を扱ふ
少し堅く隙いれども夜るぶふを出来心静ふ扱るれいうりて便
利なり○籾干三日ぶりを一日干すいハ干ずともよろしそれぞ
しのまる減ずるなり○籾干の時の用意ふ居宅の前五畝も常に
明おくところ三畝ぶりふく滑バ三畝ハ野菜なるぶ作らバ先それ
ぶどふくも年々の徳ふなるべし○菓の干方ふく艶ひまバ
賣直段よろしー○干延ハ三ケ一もいらず○籾摺の時ふぐけ

米すくなし○白米ふふむまつきぐり臼○酒米ふ用ゆるふ
最利なるよろしー○さやーるんるふ掛干にすれバ米の直段壹
石ふて三四文ハ高く賣まるなり○菓の乾きあーきを以て
俵をつくまハ甚よろしーらず菓ふり出を生ずるの患ひ
あり掛干の菓ふハそのの患ひるー○數年ーあーるんるを
壹反ふて米斗七八升又ハ弐斗も収米多くるくーとれる
金く掛干の徳なり壹反ふて米斗七升と積りて
千町ふて七百石　一万町ふて米万七千石　拾万町ふく
拾七万石百万町ふて百七十万石
假令くの如くは益なくとも多分の得ふさるくー農家ふて

一人ふ充てハ絶えりなとして空しくるるすハ冥加なき事イ
あらずや我一分くの嗜きことふし善ふ進ミ悪きを除このみ
たのごうらその徳一國ふ潤ふうれハ四民ものぞしして楽こる
理りふり豊稔

稲病

地性ふうり弱土まて締りうるき所ハ根の生ずるに不相應に
て肥培ふ思ひあひがくそれ故青稲むらくふなりて一やうよ
栄えばうを俗ふカナヤケとうふ又スマウともシホヤケ
とも云こハ大ふる患ひなり此煩ひの本を試むるふ自然と
涼く植りうるハ栄え易く浅く植りうるそ栄えがたし全く

地のうまうらぎるより煩ふことなり故ふ煤灰ホの火氣ある乾
と肥培ふへきまバ土まるまるそ強土とありて稲栄え茂るとのなり
譬へバ蹈皮草莊の紐のうるきを相應ふ締るが如しこの患ひ
を除こうんとて艸の所りあげよ水伐落し乾し堅めて後一時
ふうをへれバ稲速ふさうゆるなりうを除きて子しこれを
土地ふまれるなりうとして稲の栄えう伐利とするハるりふを
然まども世間通例の業とるれるハ理ふくらきゆゑなりうして
過りとハいうふをいつふ乾し堅めてよく栄えるハ考年乃
利ふして翌年ハ却てうろしさるハ乾しうる土ふうを決
けばいうくふさらくとして本の弱土よりもうろくなるもの

ありされハカナヤケの煩ひも前年ふ階するありこれと以て
干ぬることをあやまりといふふり
此事をとゝぐ人ハ試ふ器よりあと溜めて乾土の塊と濕
土の塊とをひまて見るべしゝきゝてハ速ふとけ為めり
さるハとけざゝし
されバカナヤケの煩ひある場所ハ肥苗ふ育てく添く植立べ
何國ゝても カナヤケを煩ふ稲と試むるふ中央ふ植りゝるハ
色浅沼ふくむらくゝ多りうて畦縁の稲ゝ栄えてあるもの
ゝりその中の茂りゝるきハ全く浅ゝ多のもゝふて根ゝまら
ぬ故なり畦下ハ肥培も一方ゝり然るゝ栄え易きハ畦土兩

ゝふ流出下ゝ故自然と沼植とゝりゝる所ゝりこれ植やう
の浅沼ゝりて損益あるの明證ゝり是と以て帰ゝ陳ま
らざゝゝ沼きと沙きとふて此煩ひの有無を辨ふべゝ
沼くゝ多ゝ合のゝきとも思ふべし○錆のゝきゝいづる
を俗ふカナヤケといふ人あれども これハ全ゝ別カナヤケふ
ハあらず○土性乾すこと甚ゝゝきゝハいゝるカナヤ
ケの田地ゝくも三年夏の間水と絶されバ終ふ患ひなき
そのゝり○カナヤケハ土性のゝざゝれバやすくハ除きゝくし
然れども月代の剃髪と肥培ふ入ゝ事ハ一時ふ絶ゝゝり○
五穀の煩ひふ病ひの発ることあり時候の如くゝゝ世ども時

候ふて發生ずるハ稀なることなり多くハ此方より發すと雖
さまバ山野の草木廣大無盡ふれども其中ふ病ひのつきるハ
いと稀なり尤自然生えの草木と異りて五穀野菜の類ハ人
の食物ふて田畑ふ蒔植るものなれバ柔なるもの故ふ病ひのつき
易き理なり然れども外より来るふあらぶ又移れるふを
あらず稀ふ時候ふて生ずる時ハその害廣しとゝ雖ども敷ずる
と速なるハ大体ハ自然ふ任せず寵愛ふあまり赤ゝ根ねたる
さるに強糞と用ゆる故疲れて病ひを生ずるなりその大本
ハ種ふのえらえやうあしきゝ又ハ雨の後ふ湿乾ぎるふ耕し
湿気土塊となる時とるせバ根さしあしくまて然ふ茂せずるる

是らを雑〻すゝえ加減を明らかふせず肥培を入るを以ての外な
ることなり又その生ずる形ふ虚弱と弱ふと瘠との三つあり俗ふ此
三ツを出来と云さてこの三ツ或雑〻くゝえを用ゆべく病害ふ
發る事ともさとるべし○稲の病ひをイモチと称す葉ふ赤
くつきて丸ゆるそのなり池河ふ堤の邊山谷ふの稲ふつき易
しいつふとるれバ風氣の通し難き所ハ弱なる故ふ暑氣温熱
し絶ふ土中ふ内攻し根これふ刻せられて煩ふなり葉ふ病れ
ること顕るれともそれ本ハ根より發るなり葉のみと思ふ
ハ全く眼の届ざるなりこと也と以て稲熟の生ずるそれ原と考
試むるに苗代ふ籾を厚蒔うして生ずるを植つけ晩きう

耕土の薄きを此三つより殺るゝ如何といつふ苗床へ敷厚く蒔ゝバ根究めて少なき故生ゝ弱小ゝ成りて前ゝ出ふゆく肥培ゝ成ふ疲き易し未ざ植つけ遅きハ未ゝ根つゝぎるふ陽氣ゝく肥培すゝむ故ふ疲れ易し耕土の薄きもこれふ同じ級ふイモチのつき易き土地ゝ成ば耕土浅くすゞし苗床ふ敷ゝ薄く蒔て肥ゝやうふ生ゝ立ゝ根の繁くつきゝゝを移すゞ植付ゝを急ぐべし

蒔蒔ふて肥ゝる苗ふハ夜ゝの須ふ本葉ゝ出のゝくゝとありこれを除くの術ハ虫ゝ殺すの条ゝにゝるゝす所ゝゝり耕すふ厚蒔有ゝものゝり是ゝ雜ゝずゞあゞゝゞず

まゞ耕土ふ厚薄あり稲麥ふも長短あり厚田ふハ長稲ゝ植べく蒔土ふハ短稲ゝゝもべしこれゝ遠ふ時ハ害ゝゝり穂熟ゝ易

俗ふゝビイモチとゝふ此病ハゝるゝこゝゝ不相違ゝり蒔ゝる

なり

如何ゝゝふゝ耕土の深ゝ地ハ肥培速ゝふゝ雜ゝさゆゑ畫氣殘り易し故ゝ疲き病ひゝふゝもの多ゝ成ハ莖長き性の稲ゝを栽べきゝゝり耕しの蒔ゝゝろふハ短稲ゝを栽べし肥培のきくゝ速ゝふて殘らざゝる故疲ゝゝゝ穂熟ゝもけゝうね

その多ゝゝゝゝく雜ゝく植つけるハ耕土の深きふ利あゞし蒔ゝゝふゝ成ゝゝゝ○野菜の病ひ

も稲と同じ理なれども数品なれども大小精粗あれハ妻しく
ハらひぐさ〳〵なるその二三を挙ん菜の類ハ陽氣なれハ性の熱
なるに濃ゐ糞を沃げハ害發り易し又葱の類もその理と
いとぐ蔥ハ四季ともに調まぬものなれハ陰中の陽艸なるこゝ
を植て直ちに肥培を用ゆるハ必病を發すいとふとなり
陽艸なれハ生ひ出る勢ひつよく根つよくなるゆゑ糞氣
ふ適ひぐ故なり 農業餘話

蟲害

夫病と虫ハ始末なり気腐て病を生て虫となる然る
ふその虫種類多くとも先ハ木火土金水の五性なり甲ハ

なる小属し毛ハ木小属し羽ハ火小属し倮ハ土小属し鱗ハ金
小属す凡五穀野菜小害をなすハ甲虫と裸虫の二つなり
毛羽鱗の三虫ハ性して害多くもならぐれハ論するふ及ぐハ
なる裸虫ハ土小属する故土中小生ず惣てものふ生する時
ハ土小属する拘故皮肉の内より生ぜ又莖葉ハ勿論物の
表小生ずるハ毛虫なり又羽虫ハ大概夏至の頃鱗と甲との
二つふく水中小生じ終小立秋の頃化し羽虫となる故秋ハ
蜻蛉胡蝶の類多くなるなり
羽虫ハ倮虫の化せるものと云ハ蚊ハくはりなり倮虫ハて
生じ飛虫ハ繁草小て熟せし所の土より生じ裸虫も

こゝ〻を化し終ハ羽虫となるなり故ハ云ふ陰虫の終ハ皆化して羽虫となるものと知るべし

虫ハ陰物なれハ夏陽ハ応して生ずるものなり故ハ已ニ進む時ハ陽火ハ盛る恐るゝ時ハ自然と北陰へ逃るゝの如し○夏秋の二節ハ北風あるゆへ虫を生ず菜の類ハ北風の後三日と出ずして倶虫を生ずるハ此ハ冷温の戦ひハなりて蔬るなり時氣ハ温なり北風ハ冷なり故ハ冷熱と含ミ果して虫を生ずこの理とよく稽ふべし○旱りつゞくハ必北の熱せるに依るを沃ぐべからず潦糞ハ更土乾きなりともさして害ハなるらぬものなり世諺ハ百日の旱ハ青菜あり百日の霖雨ハ青竹なしと云へるハ妙語なり若又乾きもゝるを湿さむとならハ陽光曇るなり又ハ多雲の但しハ小雨の降るハ陰ひ土地の冷なる時用ひそしてとす去う朝ハ冷氣なれハ毒用ひる毒しなる程なく陽光を受る故湿熱自ハ同然なるハ火の戦ひあり則虫を生ずる初めとなるべしその氣ハ多く生ずる虫なるべ父母ハなるべし父母ハ則風なり故ハ風の字凡虫と書くなり古き諺ハ万物風を以て動さ風と以て化すると云ふ然れハ冷温父母となるハ風といふ息と加して終ハ虫となる冷温の戦ひハ腐るの初め腐るハ虫の初めなり是を以て冷温戦ハざるを肝要とすべし○夫五穀の菜野菜ハ人の食物となるものゝ芸

それば柔らかあり味ひあるて糞つき易しといふ理なく
らさ故なり凡前栽ものハ利益ふ速ひ寵愛ふ餘り虚弱と
弱ふと脊との辨別なく肥培と用ふる故なりて過糞の疲
れとなり終ふ己より保糞と生ぜざる病の發ると始末因計
なり故ふ保糞ハ外より移さる少からず○秋稲ふ管の如く
葉と卷て巣となすと葉糞と称す此糞ハ糞氣滞るより
発るなり如何となれハ耕土の落き所ハ生ぜず地味深き田
ふ生ず此理とよく勘辨し耕土の深き場所などハ肥培を入る事急き速うるをとしとす必生くすべ
らず

諸の肥培ふ強弱あり又軽重あるものなれば速ふ
常りなきとそらひ用ゆべし
畑ふ生する切糞ハ反玉の前苦腐ふ生じ産生を害を
俗ふこの糞をキリウジとり関東のをあてハ根キリ虫
といふとぞ
此糞の生ずる地あらハ寒耕二三遍すべし必生ぜるものなり
秋あらし置て苦腐ふ耕し前植すれば宛めて切糞生ずる
ものなり正しく寒耕せざる故なり厚志の人試て自得す
べし○糞の風より生ずるも熱地に冷水を洒ぎるより生ず
るも雨気ふく陽氣薄く陰勝ちの年ふ稲糞の生ずるもその

理同じ事なり故ふく雑ちて両年ふハ稲黍と油菜す
べからす
又ふく因て旱年雨年ともふ菉菜大根ふハ通図の業
ふく冷熱戦ふ理とも知らすして疾く冷ゑを沃く故
年〻必ず生ずる理とも解ふべしゑを沃ぐされハ出来
ずと思ふハ大なるあやまりなり旱つくこも枯るく
そのふあらずとしも止事を潅ずハ夜ゑ曇日ふく
へし程その條下ふくしるし
肥ふる苗ともやく栽れハモトハムシとて葉のえふ黍つくる
あり俗ふハ根虫といふ此ハ時氣熱暑なりといふとも不時の冷気

まゝハ北風ふて田水冷ゑとくあり志ゑる處〻盛陽の気中て
年ふ時ハ終ふ此害を生ず故ふ雨ふげき年まゝ冷氣ぢち
なる年ハ田水深く溜ゑるぞ土むらくふ出るくるるふ減く
すべし元葉虫生ぜぬものなりもし生ぜ是ハ一反ふ鯨油二
三合入るべし
但し所くふ賦るふ反バそ油とゑハ逆なる故即座ふ配
合す
志ゑる晴天を待て入へし惣て害ハ油ふく殺すべし
又糯稲ハ甘き故モトハ虫ゑき易しゑて早植ふすべ
らず晩田ふゑゆべし

凡春より夏に移る節に虫生じ易く変より秋に
うつる節にも虫おなじくこれを以て陰陽の冷水にて
所にて早稲の稲に虫生じ晩稲の虫は生じ難く
冷飯と温飯と同櫃に納めれば腐りやすきが如し
腐と虫と前にも云ふ如く始めより○甲虫は腐に属する
物にて陰陽対待なれば死ず但虫に父母ありて
害をなすこと多し

甲虫も移らぬものなり土とあハ同性なれば移らぬ理なり
倶と甲とハ已と已とに生じ諸物のそれハ更なり厠乃
糞に生じ蛆に生ずる如くなれども虫に

あらず桶に壺に収れ土中に埋ミ口を閉て風氣を止まば虫生ずる
ことなし凡諸物甘きに辛きに堅きに和きも又五穀の
腐ひ味をあるに生ずるも陰陽の氣逆に乖に附ハその気腐
りて已と已に生ずるものなれハ倶虫と甲虫との二ツハ全く陰陽の
理を離へざるに依り生出るなり前に云ふ厠の糞に
さとるべし○アリマキを同じく倶虫に生じて外より
移るに非ずあらず此虫を関東にてハアブラ虫と云て物に
移ることもあれど已より生ぜぬ性の虫にてとかくても其害少
なしまづ莖につくアリマキハ大きに患ひをなすものなり病の
條下に記す如く疫糞より生ず虫より其證の一ツとなる

麦ハ苻つけのものなれバ厚き所ありて中ハ薄き所ア
リマキハつくものなり厚き所ハ糞の害少き故つゞきあり
○年蒙を田地ハ蒔つくれバ生茂し雜草ゆゑ糞の疲き
ゆへアリマキ生ものゆへハ生茂ゆゑ着き易し
又旱年ハ諸物ゆつき易し旱ハおさえ栄え難き故過
糞となれバゆへ又菜大根と通園の葉ゆへ何の雜へゆく
熱氣ハ糞と沃き諸穀生ゆゑ虫ゆつくもアリマキハ限り
てハ生ぜぬゆへ培ゆべし芋ゆとなれハ菜大根ハ二十四時ゆ生る
ものゆへ生立速ゆゆる故ゆ糞の疲きゆ　よゆてアリマキの
生と生ざるハ程ゆとゆく發明すべし　○凡アリマキハ疲れ

より生く疲るれバ糞ハ限らず耕土の時のゆゆゆても
生べし　必温暖のゆゆゆて後ハ耕すべし　又北風ハ疲る
ともあゆべし　これらハ繁茂し難ゆゆ糞ゆゆて
發る害なり　農業餘話

草害

夫稲を害する ハ草なり草ハ其田ハ自然と生ず繁まるに蔓
れバ害となるゆ目前ゆゆれバ其害ゆゆす草多ゆれバ其大
畧をゆゆ記す　莖穂ハ實のる草ハ陽ゆる故ハ限りあらず
也バ人力を盡すとゆゆも絶し難し根ハ實ゆる草ハ陰ハ
れバ種ハゆゆて絶きバ永くゆゆるものなり先陰草ゆゆハ

烏芋其長ゝり實肥る故人食すまゝ瓜の皮そゝまゝ仮宮
是ゝる烏芋の類ゝり秋の初め二百十日前後小除くへし賭へ
捨べゝらず其ゝ田の中ゝ至べゝ土地和らゝゝ埋
肥培とゝるものゝその故ハ田實ハ腐ゝ新實ハ未ゞ熟せざ
ゝる故ゝゝく腐ゝて永く絶ゝゝ
初夏の頃ゝハ何ゝど人力を盡すとゝども絶えざゝゝ
或人問陰草ハゝゞとゝふ永く絶えゝとゝふ信ゞ難し
愚農答て云初夏の頃ゝハ絶ゞゝ秋除けバ殘ゝゝく絶ゝゝ
いゝふとゝゝハ秋陰の初めゝして金ゝ屋す根草ハ陰中の
陰ゝり陰再三重ゝり故ゝゝて頓ゝ絶ゝゝ人れ

身ゝて考ゝゝゝ女の楊梅瘡その病の根絶し易ゝ
とゝれ楊梅瘡ハ陰病ゝり婦人ハまゝ陰ゝり陰中の陰と
陰重ゝゝる故愈易ゝゝり婦人ハまゝ陰ゝり陰中の陰と
ゝる男ハ陽故療治すまゝとも甚根絶ゞゝゝゝを以て莖ゝ穂ゝ
實のゝ類ハ陽草故何ゞど人力を盡すとゝも絶すゝゝり
難く根の方ゝゝく実入性ハその時を計りて除くゝゝハ永く絶
ゝゝゝと疑ゝゞゝゝて○田ゝゝ牛の毛と称して牛毛の如き草
生ずゝゝハ究めて瘠地ゝ新田ゝ甚外冷水の入口ゝ又ハ時ゝゝ絶て
田面乾く所ゝ生ずゝゝり土の堅閉を好ゝて生ずゝゝ
されハ麦糠ゝ麦のカレラ毛ゝゝホウシヤウともいゝこれ草ゝゝ

ふ用ふれば忽ち絶ゆ肥培の條下ふ記すべく麦ハ陽和ゆ麦閑を和け弱土ふるたものるれハ牛の毛草ハもくく絶ゆ必麦糠の類をこえふ用ゆべし　○枚菜も根草より烏芋のゆく實ハ生ざれとも根蔓ア繁えるもけるり故ふ築地ふ生し易し春の末麦の熟せるを害す此草ある地ふ麻を作る〳〵三年作れハことく多絶るるり麻ハ七八尺一丈も長するもの故覆られて絶るとゆえ古さ諺ゆ茂木の下ふ豊草なしといへり

艸害の多る土地ゆてもその作物の品ふより尅せられて草ハ絶えるとあり此麻の枚菜を死すふく思ひ雑へ

よく心ゆ用ふべし

草稗ハ稲ふ似て多ハ芸さるとゆとも殘ア易く終ふハ初秋穂の出ると見て抜きさるものなり甚除なると牛ふ飼ふ実を切すてく飼するハ通例なり然れとも捨るふ及ばそのまく喰するハよりさ食とるるり甚害セさる牛馬の類糞ハ畑のこえふ用ふべし畑ふハ生ぜぬものあり稲田ふハ入てくらすと粃糠を麦菜種ゆふ覆肥培ふすくらを荷とるれハ實ふ粒故寃めて稲藁ゆ色まさ有て米と製たるハさらぬと雑りあるものふて翌年ハ生茂するものなり必田ふハ用ゆべからず焼て灰とるべし麦菜稙ゆふの覆ひ肥

培ふ用ゆべし○俗ふ草実を生ずく半ふ食するふ腹中の熱して生ずといつり志ゑきども已れハ不審く思ふと紋ふ小麦と生ふて半ふ喰セて糞と試むるふそのとくふて生ず害をるべき草実の類ハ必生ずて ハ喰すべからず煮て飼ふべし

農業餘話

種子を撰む

往古の制度ハ民より所るの法を租庸調とて三ツ〻ふて租稅ハこれとこちらと訓ずて今の年貢ふり庸と夫役ふ一年ふ十日つとむるなりそ〻これを勤めれバその替りふ布二丈ふ尺と納むるなり調とハ家役ふて糸綿絹

などの類何ぞもそのところの産物を納るなり然るふ今ハ此制壊れてまづ〻米と金との二ツふなるそれ中ハ金ハ回ふ前て作る物ふ非ざ事ハ蓋く米の一ツ小止るなり但し山より ハ材木と出し海より漁塩の利を得てこれらハ一ふ人の子ともて作らず自然ふ天地の人と養ふ所以のをはめ新ふて其ふも國家の大ふる宝萬の基なり此外なる必何やらふる珍器名品といふこと人のまして作るもはふして未のなざれバ國の基本といふハ稲穀と山海の利なるなり中ふ魚ハ常食ふ今ふ千すべからず材木も今ふ人きものふあらざれバ止るこころハ米の一ツふ在り然共この米をもとび

作るべき事前ふいてるが如くふしてそれハ嶋穂とえらひて
作るべき事をみその條まいてるぶ〻ぬし扱みそれふつきて稙ものを
えらぶて用ふべきことも肝要のものなり無れいその種子をえ
らぶんと思ひて一切の物種いろ〻ふくもその人の居るところふ
所りて西北の方ハあしく東南の方ふ實のれる種子のと良
とす東南ハ發揚の氣と受てもろも運氣和順なるゆゑに
これを取り用ふべく又その中ものも尤善良ものを撰ぶべき
ものをあく〻ふハまて洗めるハ家ふしてよろしく浮めるもの
虚ふしてまろし種子とおろさんと拓ふ時ハこれをそらむ
べきことなりさて三月清明の節より苗代ふ種子をおろ蓑

土のうるひやう土地の善悪その外種子の次第ありといへともそ
れハその土地の風もあり且ハ百姓ところ手ハて畑ふも田耕ふ
ところ〻ところその業としておのく心ねあるべきものなれバ人〻省き
つ唯肝要なるべきことをとりて　穂三手引草
そもそも種ハ米穀繁殖の原なれバ是を撰む事肝要なり先陰
陽の運動と考へその性ふ隠ひ生理と含くして大切ふ蓄
ふべし　○種ハ外陰なるく内ふハ陽の生氣を胎ミしこのな
きハそれ元の自然ふ性ひ發露せるやうふ蓄ふるを本とて
に先稲麦ハ二品と大切ふ蓄へずハあるべからず凡種ハ其生の
厚ものふれ中ふハ陽元の性力と含ミ陰氣ふ包まること北方ふ

玉陽なるが如しなるとは則根としてあるとしてこれ陰の陽と含むの證拠なり○抑諸草木実となりては陰なり故に水に入るるを悉く沈むものなり然るに芽出るときは水に浮くことなくそのなかにこれ発生の氣盛りにして陽なる故なりさて芽の出るは青陽の風氣を受る故なりさまざまの穀類の実は陰なるものとよく蓄るるは陰氣なる器に納めて風氣を受ぬ心得を肝要とすべし風のあたるを嫌ふ故は風は芽抱生くれ始めなるまでは又腐る道理ありこれ芽の事始あれは終なるに帰るにいたるまでありさて風の氣にて腐るといふとなるまでは譬へは餅の類にて考るに温暖の須外より

殖腐るこれ外は風を受るを以てなり中はふるして腐り遅し風あるときは故なりされは風の微らさる陰物にて蓄ふるを主要なり○粃種は俵に蓄ふるものなりその俵にて大抵池河るるに十五日二十日をしるしは三十日も浸しなるかなりして根を生ずる前つくるるを通例なれども理に当らざれるよろしからず今ここに論ずるの術は粃高あるの桶に一両日漬し置き前くなるとぬき捨て羽立日その桶のまま持行て水土のかなるを苗地に蒔つくれば水土のかなるて萠出る故究めて性強しなる畑に前つくるに一夜なるに漬すべしさて桶は俵と遠ひ風氣自ら中らばまは陰を陰なり

蓄ふる故ふそれ氣發露せざるを理なきあるべ〻ハ種物を折〻
風日ふ曝すべしといへともそハあしきと知るべし○籾種ハ
稔熟の時節ふ收むるものふれハ乾き難しそれ故颺扇ま
さハ箕をもふて秕を除うんとすれども精しくまろ難し
これふ依て来年蒔つけの後必苗ふ齊苗雜り生ずそれを
植直ハ稻ふハならぬものふうり然ると前ふ除うんと欲セハ稗ふ
と入置くその中〻籾を漬し搔雜ふれハ良實ハ沈つて秕ハうく
ものふり去づめると種とし秕ハ煮て牛ふ飼ふべし○総べて
種を地ふ蒔くふ皮厚く生ず難きものハ肥熟ならざる齊
土ふ蒔て上ふうみし抑ふ〻ひどく生ずるものふり風ふ〻そ

人のふを寝さすふハ母のふを腹の上ふ置けばよくねるべし
袋ふ小豆園豆の類と入れて置くもの代ふ草木の生
立ハ根始めふ生ず葉ハ次ふ出るなり
絲ハ何國ふても蒔つけて抑ふるるりすべて絲ふ限らず一
切ふくれ如し
小児の寝くも草木の土中ふ根ざすも理ハ一つなりともに陰を
養ふ事なるべくして草木とも一つなりといへども穂ふ出て
實のるを枝ふ実のると根ふ實入ると種を取り收むる時ふハ
そまべくふ早晩ありとくく考へずあるべからず○穂ふ登る
類ハ九分ばかり熟せる時田ふて良種と撰み刈收むべし生

立早く始終性強き故よく実のるより完ふ熟して色艶
よくざる故良種えらミ難し此理と人ふらるもふ飛
脚ふるゝ人ハその父母二十歳までのうちでハ強く生るもの
より難しそうこれ若親の産めるゝ故勢壮なるより
穀類の種のハ九分ふ収めるハ盛壮なると一ツ程なり故ふ穂
を生ずる類ハ五七日も前ふ刈取りなを勢の美良の実成
種ふ収むべし先熟の種ハ収むべからず生立速なるらさるハ苗
代にて分明なり殊ふ秋の刈上げ時分ハ開しくて跡ふ落ふ
易しよく心を用ふべし○枝ふ実のる穀ハよく熟して堅実
なるを撰て種ふ収むべし穂ふ実のる稲とハ異なりまるき

実の生るハ勢ひ強きふるる故花多く咲くとゝ雖も菓多く
結び難し勢氣感んなるハうして虚花となる老熟の実を
発生の事素直なるもの故ふ多く実のるより菓の類
ハこの心得して種と撰ミ収むべし○根ふ実ける穀ハ穂ふ同じ
くハ九分の熟して掘て種ふ収むべし勢衰れバ保ち難し
殊ふ霜ふれバ寒氣と越し難しいそぎ収むべし蓄へやうハ
土のうく著くやうふひきうそ土乃まゝ地深さ三尺掘りて
埋めむべし夏どこしても芽出ず数年を経ても枯せぬもの
なりまれとも毎年場所易ざれハ徒ら労して功なし何ふ
よらず根ふ実のるの類ハ地中深く収むれバ枯むことなし

地下三尺ゐれば氣通ずるゆへ陰陽蓄ふる理ありて○
凡種物ハ陰陽雌雄を撰むを要ずる因母ゐて榮ゆるもあり
こまゝハ山の芋生姜の類ゐ回株ゐて榮ゆるもあり雌
雄の類益大さをゐるゆゑ心を用ひて撰むべし○早晩
の苗ゐハ究めて雜草多し晩稲の苗ハ草少ゐ早稲
ハ草多きハ芽さち遅き故なりいかゐゑれハ陽光高きこ
時ゐのゐ故物皮堅し故ハ生ずるゆゑ晩稲の穂ハ晩秋
ハ實のゐもれゐれバ皮やゐらゐゐ故ハ生ゐ速ゐれバ雜草ハ
ゆゑゆゑゐざる理あり○米の良種を撰むこと肝要ゐり田
廣く熟りゐる中ハ別て美良ゐる所を撰ゐて刈取ゐる

刈ゐハ撰ゐハ究めく鍬苦ゐきそのゐりそれ
ゐり音のゐしきとの取り収めてその余ハ除くべしくの如く
撰ゐゐハ来年の實のり多きものゐり○右の如くして刈ゐ
取りゐると餘力あらバ雌雄を撰むべし芸ハまづ葉ゐの年に
節ありゐり上ハ小枝數くあるものゐりそれ節の所より
出ゐる枝の一えだ出ゐハ雄ゐり二枝つきゐハ雌ゐり竹の
雌雄と同じ此雌の方と撰ゐて種ハ収むべし雌雄を
えらべ別ゐハそれ実のり稔ゐるものなり凡一反の田地
ゐく二三斗ゐり米高多く實のゐりいゐゐれいま
ととしゆゑよく撰ゐ蓄ふべし

おゝて諸の〻名物まづ種とえらぶと才一とす種あ〜れば
天の時地利人の力大ます〻る先ゝねと取るゝえらひて
よゝきと用ひあ〜き残捨つゞ〜あるひハ敷てその秕を去り
あるひハ水にそれと去りみゝふ入てその浮へるを去るそ
の中最大ふ〜して固滿なると用ゆゞ〜秕とうゝるゝとゝなれ
ゝ実ゝきゝゝふ枝ふ出来さるゝ実ハ用ゆゞ〜らずすて
やくふ枝ひくゞゝえを切り去るゞ〜

菜譜

正房按ふ老農茶話ふ稲を作るふハ先その種子を撰ゞ〜
春穀浸〜の時去年より貯置さる穀種をとり出し桶ふ
水を入まゝの種とゝゞ〜ゞゝ中へ浸〜へれ浮さあゞる
もゝハゝるあ〜しき種ゝりと心得てとり退け桶の底ふ沈ゝ
たる穀ゞりを常のゝく浸〜置て苗代ふ蒔ゞ〜と
いゝりこゝき菜譜の説ゝりゝゝ精〜ゝゝ〻ハ併せゝゝ
農政全書云おゝて菜子をまくふ生ゞゝゝきこのハこれ
ゝふ浸〜て芽と生ゼゝもゞ〜くはゞくゝれバ生ゼゞとつゝを
ゝ〜○今案ずるふゝうゝきん草ふんゝるゞハ先ゝゝにひさ
して後ゝゝゞ〜夏日ハ久〜く浸すゞゝらず實ゝうゝき物牡
丹蓮子ゝゝきつゞゝ美人蕉ゝゝるゞあゝひハゝゝゝゝられとも生じ
ゝぬゝゝあれ実ハゝね熟〜ゝゝる時その〻〻地ふまけハ来春ゝの
ならず生ず実ゝとゝり置て来春ゝゝれバ生ゞ難〜成云

おうそそのくさねをうゑるふ先人のそだてふ久しくつけく
あくまめ或八鶏のうひこと同じく毋鶏ふあくまめさせてう
月令廣義云臘月の雪水に菜穀のくさねをひたして植れば虫
くさず早ふりてまだ○種子を鯨の油に浸せば蔓延ず菜譜

農暇必讀巻二終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan